

黒い旗物語

小川未明

青空文庫

どこからともなく、爺じいと子供こどもの二人ふたりの乞食こじきが、ある北きたの方ほうの港みなとの町まちに入はいつてきました。

もう、ころは秋あきの末すえで、日ひにまし気候きこうが寒さむくなつて、太陽たいようは南みなみへと遠とおざかつて、照てらす光ひかりが弱よわくなつた時じぶん分ぶんであります。毎まい日ちのようにに渡わたり鳥どりは、ほぼしらの林はやしのようにに立たつた港みなとの空そらをかすめて、暖あたたかな国くにのある方ほうへ慕したつてゆきました。

爺じいは破やぶれた帽子ぼうしをかぶつていました。そして西せい洋ようの絵えにある年としとつた牧ひつじ羊かい者かいのように、白しろいあごひげがのびていました。子こ

ども
供は、やつと十か十一になつたくらいとしの年ごろで、寒さむそうなふう
をして爺じいの手てを引ひいて町まちの中なかを歩あるきました。爺じいは胡こ弓きゆうを持もつて、
とぼとぼと子供こどもの後あとから従したがいました。

その町まちの人ひと々びとは、この見慣みなれない乞食こじきの後うしろ姿すがたを見送みおくりなが
ら、どこからあんなものがやつてきたのだらう。これから風かぜの吹ふ
くときには氣きをつけねばならぬ。火ひでもつけられたりしてはたい
へんだ。早はやくどこかへ追おいやつてしまわなければならぬ、といつ
たものもありました。子供こどもは毎まい日にち爺じいの手てを引ひいて町まちへ入はいつてき
ました。そして戸こごとの軒のき下したにたたずんで、哀あわれな声こえで情なさけを
乞こいました。けれど、この二人ふたりのものをあわれんで、ものを与あたえ
るものもなければ、また優やさしい言葉ことばをかけてくれるものもありま

せんでした。

「やかましい、あつちへゆけ。」

と、どなるものもあれば、また家の内から、大きな声で、

「出ないぞ。」

といったものもありました。

こうして二人ふたりのものは、終しゆうじつ日ひこの町まちの中なかをむなしく歩きま

わつて、疲つかれて空腹かんを感じかんて、日暮ひぐれ方がたになると、どこへともな

く帰かえつてゆくのでした。爺じいの歩あるきながら弾ひく胡弓こきゆうの音ねは、寒さむい

北風きたかぜに送おくられて、だんだんと遠とおくに消きえてゆくのでありました。

こんなふうまちに町ひとびとの人々ひとびとには、この二人ふたりの乞食こじきを情なさけなく取とり扱あつか

いましたけれど、やはりどんなに風かぜの吹ふく日ひも、また寒さむい日ひにで

も、二人はふたりこの町まちへやつてきました。

町の人々まちひとびとは二人を見送みおくつて、

「まだあの乞食こじきがこの辺あたりをうろついている。早くはやどこへなりと

ゆきそうなものだ。犬いぬにでもかまればいいのだ。」

と、涙なみだのない残ざん忍にんなことをいつたものもあります。

そして爺じいと子供こどもは、犬いぬに追おい駆かけられてひどいめにあわされた

こともありました。そのとき町まちの人々ひとびとは、子供こどもが泣なきながら爺じい

さんの手てを引ひいて逃にげようとして、爺じいさんが胡こ弓きゆうを振ふりあげて

犬いぬをおどしている有あり様さまを見みても黙だまっていました。ある日ひ町まちの人ひと

は二人ふたりを捕とらえて、

「おまえらは、どこからきたのだ。」

といつて聞きました。すると子供は、

「ずっと遠い南の国からやってきました。そこは暖かで冬でもつばきの花が咲きます。山の畑にはオレンジの樹があり、日の落るとときには海が紫色に光つて、この町よりも、ずっときれいな町であります。」

といいました。すると町の人はこれを聞いて、気持ち悪くいたしました。

「この町よりもきれいな町があるといったな。そんならなぜその町にいなかつたのだ。なんでこの町などへやってきた。さあ早くどこかへいってしまえ。」

とどなりました。

二一

乞食の子供は、町の人の怖ろしいけんまくに震えながらいいました。

「北の方へゆけば哀れな人間をあわれんでくださる人さまのいなさる町があると聞きましたので、こうして二人はわざわざ遠いところをやつてきました。」

すると町の人々は、口々に虫のいいことをいう奴だといつてあざけりました。

「おい、小僧め、これから風が吹くから火など焚いてはならんぞ。

そしてうろついていずに、どこへなりと早く^{はや}いつてしまったほうがいい。ものがなくなると、おまえたちの盗^{ぬす}んだことにするからそう思^{おも}え。」

冷酷^{れいこく}にも、こんなことまでいいました。

子供^{こども}はなんといわれても、これにたいして怒^{おこ}ることもできずに、爺^{じい}の手^てを引^ひいて町^{まち}の中^{なか}を戸^こごと^こにたたずみながら歩^{ある}いてゆきました。そしてある店^{みせ}の前^{まえ}に立^たっていると、その店^{みせ}の主^{しゅじん}人はまた、「なんでそこにぐずぐずしているんだ。早く^{はや}いつてしまえ、人^{ひと}が見^みてい^いなかつたら盗^{ぬす}むつもりだろう。」

とどなりました。

子供^{こども}は腹^{はら}だたしさに、顔^{かお}の色^{いろ}を赤^{あか}くして、しおしおとしてその

みせまえ 店の前を立ち去つてしましました。

ある日二人は町の人々から追われて、港の端のところをやつ

てきました。そこは海の中に突き出でいて、岩がそばだつていま

す。そして波が寄せて躍り上がり、はねかえり、響きをたてて碎

けていました。

空の色は一面に鉛色に重く、暗く、濁つていて、地平

線に墨を流したようにものすごく見えます。風は叫び声をあげ

て頭の上を鋭く過ぎていました。名も知らぬ海鳥が悲しく鳴

いて中空に乱れて飛んでいました。爺と子供の二人は、ガタガタ

と寒さに体を震わして岩の上に立つていますと、足先まで大

波が押し寄せてきて、赤くなつた子供の指を浸しています。二

たりくうふく人は空腹と疲労のため、もはや一歩も動くことができずに、
 おきほう沖の方をながめて、ぼんやりと泣かんばかりにして立っていまし
 た。そのうちに、みぞれまじりの雨がしとしと降りだしてきて、
 ひ日はとつぷりと暮れてしまいました。二人は闇のうちに抱き合っ
 ていましたが、まったくその影が見えなくなっていました。
 その夜のことです。この辺りには近來なかつたような暴風が
 吹き、波が荒れ狂ったのであります。そしてその暗い、すさまじ
 い夜が明け放れたときには、二人の姿は、もはやその岬の上には
 見えなかつたのであります。町の人々はその日もその翌日も、
 かの乞食二人の姿を見なかつたので、なかにはどこへいつてしま
 ったろうなどと思つたものもありました。すると一日天氣のいい
 あるひてんき

日のこと、漁夫が沖へ出て網を下ろしますと、それに胡弓が一つひつかかつてきました。それが、後になつて、乞食の持つていた胡弓であることがわかりました。

三

その後というものは日増しに海が荒れて、沖の方が暗うございました。毎年冬になると、この港から出る船の航路がとだえま

す。それで沖を見渡しても、一つの帆影も、また一条の煙の跡も見ることがなかったのです。ただ波頭が白く見えるかと思

と消えたりして、渺茫とした海原を幾百万の白いうさぎの群れが駆けまわっているように思われました。

毎夜のように町では戸を閉めてから火鉢やこたつに当たりながら、家内の人々がいろいろの話をしていますと、沖の方で遠鳴りのする海の声がものさびしく、もの怖ろしく、ものすさまじく聞こえてくるのであります。ある夜のこと、海の響きが常よりまして、空怖ろしく鳴りとどろきましたので、人々は、なにごとか起こるのではなからうかと不安におののき、夜の明けるのを待ちました。ほのぼのと、夜が明け放れると、人々は浜辺にきて海をながめました。そして顔の色を変えてびつくりいたしました。

「あのいやな色をした船は、どこからきたのだろう。」

と、一人はいつて、沖のあなたに見えた船を指さしました。

「あの不思議な黒い旗をもらんなさい。いつたいあの船はどこからきた船でしょう。」

と、ほかのものがやはり沖をながめていつていました。遠く沖の方を見渡しますと、昨日にまして暗く、ものすごうございました。

その地平線から抜け上がったように真っ赤な船が浮いていて、黒い旗がひらひらと二本のほぼしらの上にひるがえっていました。

「昨夜は怖ろしい海鳴りがしたから、なにか変わったことがなければいいと思つた。」

と、老人がいつていました。

「よくこの荒波あらのみの上を航海こうかいして、この港みなと近くまでやってきたものだ。なにか用ようがあつて、この港みなとにきたものだろうか。」
と、一人ひとりがいつていました。

「ごらんなさい。あの船ふねは止とまっています。だれかあの船ふねはどこくにの船ふねか、お知りしの方はありませんか。」
と聞きいている若者わかものもありました。

「たぶんこの大波おおなみでゆくえを迷まよつたか、それとも船ふねに故こ障しょうができてこの港みなとに入はいつてきたのでありましょう。」
といったものもありました。そこでその船ふねに向むかつて、陸りくからいろいろの合あ図いずをいたしました。けれど、その船ふねからはなんの返へん答ともありませんでした。

「あれはあたりまえの船と違ふようだ。きつと幽霊船であるかもしれない。」

といったものもありました。そして幽霊船というものは見るものでないといつて、町の人々はだんだん家の方へ帰りました。

すると不思議なことには、ちようどその日から、町へ見慣れないようすをした十か十一ぐらいの年ごろの子供が、体に破れた着物を着て、しかも霏々として雪の降るなかに、素足で足の指を赤くして、手に一つのかごを下げて町の中を歩いていました。町の人々は顔をしかめて、そのあわれな子供の後ろ姿を見送りました。子供は町のいちばんきれいな呉服屋に入りました。

「どうか私に着物を売ってください。」

「ふる
 慄えた声で子供はいいました。」

「おまえは錢ぜにを持もっているか。」

店頭みせさきにすわった番頭ばんとうは、いぶかしげな顔かおつきをしてたずねました。子供こどもはかごの中なかをのぞきながら、

「錢ぜには持もっていないが、ここに、さんごや真珠しんじゆや金きんの塊かたまりがあります。これで売うってください。私わたしの着物きものでありませぬ。お爺じいさんの着る着物きものです。」

と申もうしました。

呉服屋ごふくやの番頭ばんとうは、うさんな目めつきで、輝かがやく真珠しんじゆや、あかが
 への指ゆびのような赤あかいさんごをながめていましたが、

「どうしておまえはそんなものを持もっている。おまえがそんなも

のを持^もつてゐるはずがない。きつと偽物^{ぎぶつ}だろう。どこから拾^{ひろ}つてきたか。」

「いいえ偽物^{ぎぶつ}でもなければ、拾^{ひろ}つてきたのでもありません。これはほんとうの真珠^{しんじゆ}や、さんごです。私^{わたし}を疑^{うたぐ}つてくださいませぬ。早く私^{わたし}に着物^{きもの}を売^うってください。お爺^{じい}さんは船^{ふね}に待^まつています。お爺^{じい}さんは、あの黒^{くろ}い旗^{はた}の立^たつてゐるほばしらの下^{した}のところにすわつて待^まつています。」

と、子供^{こども}はいいました。

「おまえのいうことは、みなうそらしい、着物^{きもの}は売^うることができない。早くこの店^{みせ}の前^{まえ}をいつてくれい。」

番頭ばんとうは子供こどもをおいたてました。

子供こどもはしかたなしに、雪ゆきの降ふる中なかをとぼとぼと歩いて、その店みせの前まえを去さつて、あてなくこちらにきかかりますと、そこには食たべ物もの屋やがあつて、おいしそうな魚さかなの臭においや、酒さけの暖あたまる香においなどがもれてきました。子供こどもは其店そこの前まえに立たちました。そして戸とを開あけてのぞきながら、

「どうか私わたしに煮にえた魚さかなと、暖あたかいご飯はんを売うつてください。銭ぜはな
いけれど、ここにみごとなさんご樹じゆと、きれいな星ほしのような真しんじ
珠ゆと、重おもたい金きんの塊かたまりがあります。私わたしはなんでも暖あたかな食たべ物ものを
持もつていって、お爺じいさんにあげたいと思おもいます。」

といました。

すると、このときそこで酒を飲んでいた三、四人の若者は、

目を円くして子供のかごと、子供の顔を見比べていましたが、

「汝は、いつかこの町へきた乞食の子供じやないか、太いやつだ。

どこからそんな品物を盗んできた。さあ白状してしまえ。

みなその品物をここへおいてゆけ。」

といいながら飛び出してきました。

「いいえ、盗んだり、拾ってきたりしたものではありません。あ

の沖にきている船からもらってきたのです。」

と泣きながらいったのです。けれど若者らは無理にかごを奪い

取つて、子供をおいたててしまいました。子供はどこともなく雪

の降る中を、泣きながら去ってしまいました。いつしか吹雪のう

ちに日ひが暮くれてしまいました。

その夜よのことでもあります。この町まちから火事かじが出て、おりしも吹ふき募つった海風かいふうにあおられて、一軒けんも残のこらず焼やきはらわれてしまいました。いまでも北海ほっかいの地平線ちへいせんにはおりおり黒くろい旗はたが見みえます。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「日本少年」

1915（大正4）年4月

※表題は底本では、「黒《くろ》い旗《はた》物語《ものがたり》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黒い旗物語

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>